大阪城
2022 12/12 (月) 14315号
全港湾西成分会
ごんめ 6647-4947

少しづつ寒くなってきている。早朝は軍手があった方が助かる。来週ぐらいからは気温が日中でも10度以下、早朝は4度、2度に下がるという。

社会は、一年のしめと新年にむけ動いている。国会も、土曜日も仕事をしたといって、予定通り12/10(土)でしめたようだ。統一教会の被害者救済の新法を成立させたと一区切りしたようだが、共産とれいわ新選組は、ぬけ穴があり、不充分な法律だとして反対という。2年ぐらいで見直すとしている。

国会は、1/27ごろから通常国会として再開のようだが、その間に、アメリカへ行ってバイデン、岸田会談をやりたいとかいっている。アメリカにひきづられて、軍事国家にかじを切ったようだ。80年も前には、過去の敗戦の反省、よく検から「科学立国」とか理念をかかげ進んでいたが、その道は消えて、再度の敗北と没落の道にはまっていくようだ。金の使い方が、軍事に優先的に流れる政治・経済構造が生れていくのだろう。日本をひきまわすアメリカも、1/8中間選挙も終りトランプの芽は日々なくなっている流れにあるが、国内の2極化、分断は深く大きくなっている。日々の生活での、物価高インフレの波は大きくなってきて、新年も続くだろう。ウイルス、インフレ、軍事化と戦う新年になりそうです。

毎日新聞2022-12-11朝刊

貧しくても心は豊か

昭和の釜ケ崎（西成）を撮影

第2弾写真集

写真家 庄司丈太郎さん

写真家、庄司丈太郎さん（75）＝鳥取県米子市＝が昭和の「釜ケ崎」（大阪市西成区、あいりん地区）を撮影した写真集「貧しかったが、燃えていた」のシリーズ第2弾が今秋、解放出版社から発売された。「釜ケ崎で生きる人々――昭和ブルース編」のサブタイトルが示すように、日雇い労働者のまちで生き抜く人々の笑顔と、その裏側にある悲哀を生々しく写している。【望月靖祥】

庄司丈太郎さん

いずれも1960～90年代に撮影したもの。公園で全裸になって寝転ぶ男性や段ボール小屋で寝る男性、なぜか上半身裸になった女性などのほか、路地裏や中心地「三角公園」の風景など約200点のモノクロ写真を収録。時代の記録集としても貴重な存在だ。

庄司さんは46年、米子市生まれ。高度成長期の60年代に釜ケ崎で日雇いの仕事をしつつ、専門学校で写真を学んだ。71年に「カメラ毎日」（毎日新聞社）で釜ケ崎を舞台にした作品を発表して注目を集め、その後も釜ケ崎や沖縄などをモチーフにした写真集を出版。2019年には「昭和の子どもたち」のサブタイトルがついたシリーズ第1弾を南々社から出版していた。

「釜ケ崎三角公園／粋なアンコちゃん」＝庄司丈太郎さん撮影、写真集「貧しかったが、燃えていた」（解放出版社）より

信頼関係 築き

相手が「撮って」と言い出すまでは絶対に撮影しないのが庄司さんの「マイルール」。釜ケ崎でも、何カ月もかけて相手と信頼関係を築いた後、ようやく愛機のニコンFで撮影に臨んだという。庄司さんは「住人は皆、貧しくても心が豊かだった。この写真集が、豊かさとは何かを考えるきっかけになってほしい」と語る。

庄司さんは印税を受け取らず、製作費などに回すという。A4変形判、216ページ。税別5000円。問い合わせ先は解放出版社（06・6581・8542）。

12／3に出版記念会が行われ友人として参加しました（NK）